

日本英文学会中部支部
第 74 回大会(Zoom 大会)プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日 時:2022 年 10 月 22 日(土) 12:50~16:40

日本英文学会中部支部事務局

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12

愛知学院大学文学部 前田満研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

事務局・開催校からのお知らせ

[支部大会の概要について]

Zoom 大会の概要および入室のための URL 等については、10 月の中旬までにメーリングリストを用いて会員の皆様にお知らせいたします。いましばらくお待ちください。

[支部大会当日のお願い]

- (1) 大会への参加の際は、必要なとき以外、Zoom のマイクとカメラをオフにさせていただきますようお願い致します。原則として発表者と司会者および質問者の方のみマイクとカメラオンとなります。
- (2) Zoom に表示される名前はできるかぎり漢字の氏名でお願い致します。（例えば、「前田 満」）
- (3) 研究発表において発表者に質問をされる場合は、カメラとマイクをオンにして「質問です」などとおっしゃっていただき、司会者の方から指名されてからご所属とお名前をお伝えいただいて質問にお入り下さい。また、多くの方に質問の機会をもっていただくため、質問が長時間にならないようご配慮ください。

日本英文学会中部支部第74回大会(Zoom大会)プログラム

日時: 2022年10月22日(土) 12:50~16:40

開会の辞 12:50~12:55

日本英文学会中部支部長 石川 一久

総会 12:55~13:10

シンポジウム 13:15~15:25

第1室(イギリス文学)

『PageとStage—18世紀のシェイクスピアをめぐる—』

司会・講師 三原 穂 (愛知県立大学准教授)

講師 小西 章典 (大同大学教授)

佐々木 和貴 (秋田大学名誉教授)

第2室(アメリカ文学)

『アメリカ文学における「ダメ男」の系譜』

司会・講師 柳沢 秀郎 (名城大学教授)

講師 中村 栄造 (名城大学教授)

大場 厚志 (東海学園大学教授)

菅井 大地 (愛知学院大学講師)

第3室(英語学)

『位相を再び考える』

司会・講師 前澤 大樹 (藤田医科大学准教授)

講師 岩崎 宏之 (宇都宮大学助教)

小町 将之 (静岡大学准教授)

山村 崇斗 (筑波大学助教)

研究発表 第1発表 15:35~16:00 第2発表 16:05~16:30

第1室(イギリス文学) 15:35~16:30

第2室(アメリカ文学) 15:35~16:30

第3室(英語学) 15:35~16:30

第4室(英語学) 16:05~16:30

閉会の辞 16:35~16:40 日本英文学会中部副支部長 近藤 浩

研究発表一覧

第1室(イギリス文学)

司会 道木 一弘 (愛知教育大学教授)

1. 風の詩学—豎琴と螺旋—
石川 隆士 (琉球大学教授)

司会 鈴木 実佳 (静岡大学教授)

2. Jane Austen, *Persuasion* と破棄された約束
西山 徹 (名城大学教授)

第3室(英語学)

司会 久米 祐介 (名城大学准教授)

1. 指示詞を伴う後置属格構造の発達について
茨木 正志郎 (関西学院大学准教授)

司会 松元 洋介 (中京大学准教授)

2. 初期英語における結果構文と使役移動構文の通時的関係性
玉田 貴裕 (皇學館大学助教)

第2室(アメリカ文学)

司会 鈴木 元子 (静岡文化芸術大学名誉教授)

1. David Foster Wallace と病—Thomas Pynchon, Virginia Woolf と比較して—
林 日佳理 (岐阜大学助教)

司会 平野 順雄 (椋山女学園大学教授)

2. Wallace Stevens の “An Ordinary Evening in New Haven” における「最高ならざる虚構」
長畑 明利 (名古屋大学教授)

第4室(英語学)

司会 大澤 聡子 (岐阜市立女子短期大学教授)

2. 英語前置詞 in の意味論に関する一考察—形状の in に焦点を当てて—
藤原 隆史 (松本大学准教授)

シンポジウム・要旨

第 1 室 (イギリス文学)

Page と Stage: 18 世紀のシェイクスピアをめぐる

司会・講師 愛知県立大学准教授 三原 穂
講師 大同大学教授 小西 章典
講師 秋田大学名誉教授 佐々木 和貴

本シンポジウムはページとステージの両面から 18 世紀のシェイクスピアの実態に迫ることを目的としている。18 世紀においてシェイクスピアは、舞台において声で演じられて観られるものであると同時に、印刷ページにおいて文字で読まれるものにもなり、後者の展開は 18 世紀のシェイクスピアを特徴づけるものとなった。デイヴィッド・ギャリックが活躍した 18 世紀中葉は、19 世紀初頭までに達成されるページとステージの分離の前段階であり、劇場から書齋へとシェイクスピアが移動していくことで、ページとステージの分離が進みはじめた時期であったと言える。このような状況を考慮に入れながら、シェイクスピアのテキストそのものではなく、その周縁にある口絵や図版、脚注、劇中歌、役者の演技や舞台装置に焦点を当てて、18 世紀のシェイクスピアをめぐるページとステージの関係性を明らかにしていく。

デイヴィッド・ギャリックと〈疲労困憊のアントニー〉

小西 章典

デイヴィッド・ギャリックによるシェイクスピアの翻案劇『アントニーとクレオパトラ』(1759)は、上演に際し、当時すでにシェイクスピア全集(1768)の編纂に着手していたとされるエドワード・ケイペルの助言をあおいで翻案本文が作成される。ギャリックは、ページに対するこのような配慮とともに、新しい衣装と scene の導入を観客に約束してステージに対する目配りも忘れない。それなのに、興行は失敗、アントニーを演じたギャリックには、疲労困憊だけが残ってしまう。

本発表では、翻案劇『アントニーとクレオパトラ』のページとステージをめぐる問題について、scene painter たち—John Oram など—の視点から考えてみたい。scene painter たちの活躍に支えられた 1720 年代以降のパントマイム人気とシェイクスピア演劇の関係を視野に入れつつ、シェイクスピア演劇が scene のスペクタクル性との融合をいったん断念しようとする分水嶺を、疲労困憊するアントニーの姿に見るのが、今回の目論見である。

印刷ページと劇中歌の不可分な関係—進展するシェイクスピアの歴史的理解—

三原 穂

18 世紀のシェイクスピアに関わる学術研究の深化と発展に注目しつつ、舞台上ではテキストから切り取られていたシェイクスピア劇の劇中歌が、印刷ページ上でどのように扱われたのかを考えたい。印刷ページ上で展開される学術的傾向によって、シェイクスピア関連の印刷本の綿密な文献調査に基づいて、ジョージ・ステイヴンズ(George Steevens)やエドモンド・マローン(Edmond Malone)などの 18 世紀のシェイクスピア編集者たちが、劇中歌をシェイクスピアのテキストに繋ぎとめるのかどうかの妥当性を慎重に判断していく過程を見出したい。舞台演出の上で、劇中歌が取り外し自由のモジュールとして機能したことは否定できない。しか

し同時に印刷ページ上においては、劇中歌は、脚注におけるその歴史的説明と相俟って、歴史的文脈に照らし合わせてシェイクスピアを真に理解しようとする学術的動向には必要不可欠な、シェイクスピアのテキストから切り離すことのできない重要な構成要素となりうるものであったことがわかるのである。

フューズリか、インチボールドか—19世紀初頭のシェイクスピア

佐々木和貴

アレクサンダー・チャーマーズ版シェイクスピア全集(1805)とThe Bell's *The British theatre series*の後継としてロングマン社が刊行した *The British theatre* (1806-8) は、ほぼ同時期に出版された。前者はS・ジョンソン&G・スティーヴンズ版シェイクスピア全集第5版(1803)を底本に採用し、全作品に厳選された注とヘンリー・フューズリの口絵がついたいわば簡略版 scholar's edition である。後者は上演台本を使用した acting edition で、最初の5巻がシェイクスピアに当てられた。また冒頭にはエリザベス・インチボールドの序文と上演時の配役表がつき、こちらも全作品が口絵入りである。そこで本発表ではさまざまな点对照的な両者をとりあげ、口絵の比較や、学者たちがつけた注とインチボールドのコメントの差異などを手がかりに、19世紀初頭のシェイクスピアをめぐるページとステージの関係性を検討してみたい。

第2室(アメリカ文学)

アメリカ文学における「ダメ男」の系譜

司会・講師	名城大学教授	柳 沢 秀 郎
講師	名城大学教授	中 村 栄 造
講師	東海学園大学教授	大 場 厚 志
講師	愛知学院大学講師	菅 井 大 地

『ザリガニの鳴くところ』(2020) というアメリカの小説が日米で人気を博したことは記憶に新しい。この物語を読んでいて身につまされるのが、湿地帯で一人たくましく生きるヒロイン少女と裏腹な男性登場人物たちのダメ男ぶりである。父も兄も恋人も幼い彼女をひとり残してことごとく湿地を去り、父にいたってはアルコール依存症と児童虐待の末に蒸発するという、おそらくはハック・フィンの父親から面々と受け継がれているアメリカ文学の伝統的ダメ男であろう。

しかしながら、アメリカ文学におけるこうした「ダメ男」たちが物語で果たす役割は決して小さくはない。彼らが語りの対象になり得ているのは、主人公あるいは語り手にとって無視できない存在であるからにほかならず、彼らの視線の先にあるダメ男たちの無様な様相は、それぞれの物語背景をなすさまざまな時代および社会的価値観を逆照射し、アメリカのどの時代や社会にも必然的に存在していたさまざまな意味での不適合者たちの悲壮美として読者の心を揺さぶるのである。

本シンポジウムではアメリカ文学に登場する「ダメ男」に焦点を当て、彼らの役割やカッコ悪さの魅力について考えたい。そこでまずは「リップ・バン・ウィングル」を出発点とし、この恐妻家主人公にダメ男の典型を確認する。次いでホーソー、ジェームズ、ヘミングウェイ、ブローティガンを主に取り上げ、ロマン主義からリアリズム、モダニズム、ポストモダニズムそれぞれの時代を標榜する「ダメ男」たちの諸相を考察していく。読者を苛立たせるも無視できないダメ男たちの系譜をアメリカ文学史の中にわずかでも浮き彫りにできれば幸いである。

モダンが生んだ恋愛ダメ男—『日はまた昇る』を中心に—

柳 沢 秀 郎

人びとの価値観を大きく変えたモダニズムの時代、アメリカ社会はどのような男性に「ダメ男」のレッテルを貼ったのであろうか。短髪でジャージ姿の女性たちがけん引していた社会環境が「イケてる」男性像の定義を書き換えたことは容易に推察されるが、それは同時に、新たな「ダメ男」の誕生を逆説的に物語る。例えば、アメリカの代表的モダニズム小説のひとつであるヘミングウェイの『日はまた昇る』にも、浪費家や性的不能者など様々な意味での「ダメ男」たちが登場するが、ロバート・コーンに対する主人公の関心は、コーンが体現しているこの時代特有の「ダメ男」ぶりがあると発表者は考えている。そこで本発表では、『日はまた昇る』を中心に、モダニズムの時代特有の「ダメ男」たちの様相について論じたい。

アメリカン・ダメ男の映像表現を中心に

中 村 栄 造

アメリカ文学にはいくつも「 \langle 常数 \rangle 」が存在するであろうが、代表的なもののひとつに、「ダメ男」像を想定することは不可能ではあるまい。強烈な男性規範が必然的に伴う影（ダブル）としてのその存在は、文学のみならず、映像にも魅力的な人物像を輩出し続けてきた。文学作品にアダプテーションが施される際には、原作に秘められたテーマが、斬新な形で表現される場合がある。本発表では、ダメ男物語の父祖的位置を占める「リップ・ヴァン・ウィンクル」と「スリーピー・ホロウの伝説」の映像化作品から特徴的な場面を紹介したのち、別のいくつかの映像作品から、直系の子孫としての「ダメ男」の姿を確認する。反復脅迫されるかのように出現する彼らの姿を通じ、いかなる時代の変遷を経ても、定型として出現し続けるダメ男表象の意義や意味について考察する、ひとつの契機になればと願っている。

ホーソンとジェームズの「ダメ男」

大 場 厚 志

「リップ・ヴァン・ウィンクル」を源流とするとおぼしい「ダメ男」の系譜は、その後アメリカ文学において連綿と続いていく。ロマンティズムの作家ナサニエル・ホーソンと、リアリズムの作家ヘンリー・ジェームズの作品にも、その系譜に連なる人物が繰り返し登場する。彼らの作品は「ダメ男」だらけと言ってもいいくらいである。本発表では、主として、ホーソンの代表的作品のひとつである「ウェイクフィールド」とマイナーな作品「ミセス・ブルフログ」、ジェームズの初期の作品「情熱の巡礼」と後期の作品「密林の獣」をとりあげ、「ダメ男」像についてさまざまな視点から考察する。20 世紀の作家や映像作家たちが描く「ダメ男」像へと橋渡しができればと思う。

ハードボイルドを夢見て—ブローティガンが描く「ダメ男」のサバイバル

菅 井 大 地

リチャード・ブローティガン(Richard Brautigan)の作品には「ダメ男」が頻繁に登場するが、それらはしばしば男性性規範のパロディの体裁をとる。本発表では、ハードボイルド探偵小説のパロディである *Dreaming of Babylon: A Private Eye Novel 1942* (1977)を中心に、夢想癖のある「ダメ男」の生存戦略について考察する。仮にハードボイルド小説が、腐敗した都市社会に対して個人の倫理規範を武器に戦いを挑む自立した「男らしい」男性の物語であるとするならば、ブローティガンの描く探偵はそうしたハードボイルドな男性性規範をことごとく裏切ることになる。この「ダメ男」は、Larry E. Grimes の言葉を借りれば、「ハードボイルドの規範に従ってうまく生き抜くことができない人物」になるわけだが、本作において「ダメ男」が「ダメ」なままで生き延びてい

ることは注目すべきだろう。男らしさを夢想しながらユーモラスに生き延びる「ダメ男」は、都市社会への適応の一形態を示しているのではなかろうか。

第 3 室 (英語学)

位相を再び考える

司会・講師	藤田医科大学准教授	前澤大樹
講師	宇都宮大学助教	岩崎宏之
講師	静岡大学准教授	小町将之
講師	筑波大学助教	山村崇斗

Chomsky (2000)で Uriagereka (1999)の多重書き出しが採用されて以来、位相(phase)は書き出し/転送と位相不可侵条件の適用単位として、派生の厳密循環性を保証する役割を果たしてきた。この仮説は現在に至るまで維持されており、位相は文法モデルに於いて依然として重要な位置を占めるが、議論の焦点が他の理論装置に移る中で、その本質についての探究がやや背景化した感は否めない。

本シンポジウムでは、ラベル決定法(Labeling Algorithm)や作業空間(Workspace)に関するより近年の提案を踏まえ、現行の理論的文脈の中で位相の定義や位置付けを改めて問うことで、上述の伝統的理解の妥当性を検証する。より具体的には、位相と、代名詞束縛(岩崎講師)、転送の挙動(前澤講師)、等位構造制約と ATB 現象(山村講師)、一致操作とコピー形成(FormCopy) (小町講師)との関りを検討し、それぞれ新たな提案を行うことを通して、従来とは異なる視点から位相・位相性とは何かという疑問への接近を試みる。

フェイズと束縛の関わりについて—Grano and Lasnik (2018) を手掛かりに—

岩崎宏之

Grano and Lasnik (2018) は、定形埋め込み節の主語が束縛代名詞である場合は、主節と埋め込み節の境界が透明になると観察している ((1) *This magazine is too lowbrow for Johni to claim that he read.*). 束縛の観点から見ると、(2) *Johni thinks that himselfi will be nominated.* が容認されないこともあり、どのような統語派生を経て(1)の John と he が束縛関係を結ぶのかは興味深い論点である。Saito (2017) は、(2)に相当する日本語の文が容認されることを指摘し、その日英語の違いを ϕ 素性一致の有無に還元している。本発表では、Saito の洞察を踏まえ、(1)の that は Force の位置で音声素性のみを持ち統語上は不活性の要素であるという仮定を導入し、(1)の束縛関係に対して説明を与える。本提案により、極小主義に則った束縛の理論として転送に依拠したものが有望であることが示唆される。尚、本提案の更なる応用を目指して、英語の that 痕跡効果など他の現象にも言及する予定である。

転送と位相

前澤大樹

本発表では、転送(Transfer)に関して次の 2 つの主張を行う。(i) 転送は自由に適用可能である。(ii) 転送は転送領域を文字通り「切り離す」過程であり、従って分断されたそれらを「組み立て直す」後統語的操作が存在する。Chomsky (2004)以来、転送は位相レベルで適用されると考えられてきた。しかしよく検討すると、位相がどのように定義されるにせよ、それに基づいて転送のタイミングと転送領域を決定することには問題があることが明らかとなる。これを前提として、更に Collins and Stabler (2016)の提起する「組立問題(assembly problem)」に対する可能な 2 つの接近法のうち、(ii)を採用することの妥当性を示すため、

Maezawa (2019, 2020, 2021)の提案に基づいて貼票(labeling)と転送の相互作用を検討し、(ii)を仮定して初めて(A) 不適格性が説明される構文、(B) 適格性が説明される構文を探究し、日本語の二重ヲ格制約が(A)の、tough 構文が(B)の例だと主張する。

探索の帰結からみた位相

小町 将之

語の計算システムにおいて併合が構築した構造は、いわゆる第三要因に動機づけられた探索によって解釈が与えられ、言語外の認知システムに提供される。Chomsky (2021)は、(典型的には内的併合によって得られる)複数の同形要素間に成立する同一性を保証するため、探索の帰結として FormCopy (FC)という解釈操作を提案した。FC は、併合が果たすべき役割を軽減し、派生をより「マルコフ的」に維持できるうえに、義務的コントロールの移動分析に関する洞察(Hornstein 2001)を無理なく捉えられる効果をもつ。Omune and Komachi (2022)はこのアプローチを拡張し、一致操作も探索の帰結として捉えることを提案し(Σ_{Agr})、長距離一致の問題に接近した。本発表では、探索に基づくアプローチの可能性をさらに追究するため、主に再帰代名詞の束縛現象をどのように説明するかをめぐって、FC と Σ_{Agr} がどのような役割を果たすか、および位相がどのように定義されるかを検討する。

等位接続構造からみた位相

山村 崇斗

等位構造制約は2種類に下位分類される(Zhang (2010))。ひとつは一部の等位項のみを移動の対象にする Conjunct Condition(CC)、もうひとつは一部の等位項の内部から要素を抜き出す Element Condition(EC)と呼ばれる。Chomsky (2021)は、等位項間の整合を強制する操作 FormSequence(FSQ)を仮定し、ATB現象やEC違反について議論しているが、その分析方法の重要な点は、FSQ適用前であれば等位構造内部はその外部からアクセス可能だということである。Chomsky は、FSQ後の等位項間の不整合によってEC違反を説明するが、Bošković (2020)は、EC違反が許容される通言語的な事例などを挙げ、位相性とラベル付けの観点で等位構造を論じている。本発表では、等位構造や等位項への操作の適用可能性や等位項間の必要とされる整合性について位相が果たす役割や、EC違反だけでなくCC違反を許容する言語や構文の存在の可能性に関する検討を行う。

研究発表・要旨

第 1 室 (英文学)

司会 愛知教育大学教授 道木 一 弘

第 1 発表

風の詩学—豎琴と螺旋—

琉球大学教授 石川 隆 士

本研究は、自らを取り囲む空間に対する人間の意識の変遷を、風の表象という側面から考察するものであり、「豎琴」と「螺旋」という二つの修辞をその機軸とする。豎琴はギリシャ神話の昔から世界の体系性の象徴であったが、ロマン主義以降、照応的調和の象徴となっていた。一方螺旋は混在する多様な存在が互いの関係を見出しながら実現されていく生成的な調和を表象し、特に 20 世紀以降、世界の多元化に符合するように顕著にたち現れる。

多様性、動的連続性という特徴で有名なケルト文様に見られる螺旋は、20 世紀以降、世界の「再」多元化の中で生成的調和を表象する螺旋と共通点が多い。つまり生成的調和の思考方法は、中央集権的で一元的な世界観を主張するグレコ・ローマン社会によって周辺に追いやられていただけなのである。本発表においては、螺旋という表象の、消滅することなく再生したその普遍的な意義と共にその新たな振る舞いについて分析を行う。

司会 静岡大学教授 鈴木 実 佳

第 2 発表

Jane Austen, *Persuasion* と破棄された約束

名城大学教授 西山 徹

1797 年、対仏戦争のあおりを受けてイングランド銀行は銀行券の兌換を停止した。銀行券とは持参者に正貨を支払うことを約束する手形でもあったが、兌換停止以来、その約束は破棄されていたことになる。Jane Austen が作家として活躍した時代は、この金融危機を乗り越えるための議論が活発に行われた時代でもあった。小説 *Persuasion* の興味の中心は破棄された婚約という約束が復活するかどうかにあるが、この小説が書き上げられた 1816 年は、金本位制が定められて、(実際の兌換再開は 1821 年まで待たねばならなかったものの) イングランド銀行の「約束」が制度上は復活した年である。また Jane の小説出版の代理人でもあった兄 Henry の銀行が破綻したのもこの年のことなので、当時彼女は金融問題を意識せざるをえない立場にいた。本発表では *Persuasion* における約束の破棄という主題について考えたい。

第1発表

David Foster Wallace と病—Thomas Pynchon, Virginia Woolf と比較して—

岐阜大学助教 林日佳理

「私たちはみな自分の頭蓋骨の中に閉じ込められている」と David Foster Wallace は言う。そこから脱出することは、しかし、二つの相反する意味を示唆する——自他の境界を越えて共感すること、あるいは自己を抹消して死ぬこと、である。Wallace の描く、精神の病を持つ人物の意識には、こうした矛盾する脱出願望がしばしばあらわれる。ここには、Wallace 自身の人生、自殺、病歴が透けて見えると同時に、作家としての Wallace がポストモダニズム以降の時代を書くことにおいて、どのような特徴を持っているのかを考察するヒントを見ることができるのではないか。本発表では、病を抱える人間の思考の表象方法を時代的に比較検討することで、Wallace の表現の特徴を明らかにすることを試みる。この目的において Wallace と比較するのは、ポストモダニズム的なパラノイドの意識を扱う Thomas Pynchon と、モダニズム的な意識の流れにおいて病んだ精神を見つめる Virginia Woolf である。

司会 椋山女学園大学教授 平野順雄

第2発表

Wallace Stevens の “An Ordinary Evening in New Haven” における「最高ならざる虚構」

名古屋大学教授 長畑明利

Wallace Stevens は、しばしば、現実世界を正しく描写・提示することの困難を詩の主題とした。私たちは現実の仮の姿を見ているに過ぎず、真の世界を見ていないとするこの哲学的主題は、彼の詩において、世界の真の姿を提示する言説あるいはそれを体現する詩の役割の議論と結びつく。そこで彼はそのような言説を「虚構」と呼び、ときに、それが世界の真の姿を伝える「最高の虚構」になりえていないという失望を表明するが、後期の詩では、仮に「最高ならざる虚構」が世界の真の姿を伝えるだけの力を持ち得ていないとしても、それが真の世界像に代わるものとして通用することはありうるとも主張する。本発表では、晩年の長編詩 “An Ordinary Evening in New Haven” において、虚構をめぐるこのような議論が隠喩や象徴に窺われることを確認し、さらに、「最高ならざる虚構」についての詩行に読み取れるのは失望か、それとも自信かという古い問いについて再検討する。

第1発表

指示詞を伴う後置属格構造の発達について

関西学院大学准教授 茨木 正志郎

本発表では、指示詞を伴う後置属格(あるいは二重属格)の英語史における出現と発達のメカニズムについて明らかにする。後置属格とは、前置詞 *of* の後ろに所有代名詞か属格名詞句が後続する構文を指し、名詞前位の修飾要素には不定冠詞が修飾するタイプと指示詞が修飾するタイプが存在する。本発表では、指示詞が修飾する後置属格に焦点を当てる。史的コーパスを用いた調査より、指示詞を伴う後置属格は15世紀中頃に出現したが、一定数観察されるようになったのは17世紀後半から18世紀前半であることを明らかにする。出現のメカニズムに関しては、後置属格は二重決定詞と呼ばれる構造から発達したという Heltveit (1969) や Fischer (1992) らの主張に従い、den Dikken (2006) の RP 構造を採用し、Ibaraki (2010) の属格付与の史的变化の観点から説明を試みる。

司会 中京大学准教授 松元 洋介

第2発表

初期英語における結果構文と使役移動構文の通時的関係性

皇學館大学講師 玉田 貴裕

結果構文(例: *John wiped the table clean*)は古英語では非常に稀であり、中英語以降に少しずつ増えていく。特に非選択目的語を含む結果構文(例: *John yelled himself hoarse*)の出現は中英語後期以降であり、より生産的になるのは初期近代英語以降である(Broccias (2008))。この結果構文と形式的によく似ている構文に使役移動構文がある(例: *Frank sneezed the tissue off the table*)。両構文は意味的にも密接な関係にあることが先行研究で指摘されており、特に Goldberg (1995) は、結果構文は使役移動構文からのメタファー的拡張であると論じている。本発表では、歴史コーパスを用いて、古英語・中英語における結果構文と使役移動構文の特徴を独自に調査する。その上で、結果構文の発達と使役移動構文の通時的関係性について検討を行う。

第1発表

英語前置詞 *in* の意味論に関する一考察—形状の *in* に焦点を当てて—

松本大学准教授 藤原 隆史

前置詞の認知意味論研究では、コアミーニング(Core Meaning = CM)とイメージスキーマ(Image Schema = IS)、さらに、トラジェクター(Trajector = TR)とランドマーク(Landmark = LM)という概念を導入し各用法が説明される。

前置詞 **in** は **CM** が容器の **IS** で表現され、**TR≠LM** という前提から各用法が説明される。例えば、**He is in a living room.** という典型例においては、**a living room** が容器に見立てられた **LM** であり、**he** がその内部に存在する **TR** であると解釈される。しかしながら、**She cut the cake in six pieces.** においては、**six pieces** は容器とは見なすことができず、**TR** である **the cake** が **six pieces** の内部に存在する、という解釈にも無理がある。

本研究では、これまでの前置詞 **in** の説明で前提とされてきた **TR≠LM** という図式ではなく、「形状の **in**」の用法に着目し、**TR=LM** という考え方を導入する。その上で、上記で挙げた用例を含むいくつかの用例に対して、**TR=LM** を前提とした「形状の **in**」からの派生という考え方に基づいた新たな説明を提案する。

関係役員一覧

支部長	石川 一久	(愛知学院大学)
副支部長	近藤 浩	(愛知学院大学)
支部選出評議員	山本 卓	(金沢大学)
支部代表理事	滝川 睦	(名古屋大学)
事務局長	前田 満	(愛知学院大学)
事務局長補佐	森藤 庄平	(岐阜市立女子短期大学)
事務局長補佐	大澤 聡子	(岐阜市立女子短期大学)
書記	澤田 真由美	(愛知学院大学)
監事	本多 尚子	(愛知大学)

大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

英文学

◎伊藤 裕子	(中部大学)
鈴木 実佳	(静岡大学)
三原 穂	(愛知県立大学)

米文学

鈴木 元子	(静岡文化芸術大学)
竹野 富美子	(東海学園大学)

英語学

川端 朋広	(愛知大学)
○久米 祐介	(名城大学)
松元 洋介	(中京大学)
大澤 聡子	(岐阜市立女子短期大学)

大会開催校委員

一の谷 清美	(名城大学)
久米 祐介	(名城大学)
中村 栄造	(名城大学)
西山 徹	(名城大学)
柳澤 秀郎	(名城大学)